病棟の子も遊びが大切

安曇野でボランティア交流会

東京都などのボランティアと、県立こども病院のボランティアが互いに活動の紹介をした交流会＝安曇野市

病気で入院中の子どもたちの遊び相手になるボランティアがある。県立こども病院（安曇野市）と、首都圏の病院でこの活動をする人たちが同市に集い、交流会を開いた。子どもが楽しい時を過ごすことは、病と闘う力になり、笑顔が親の力にもなる。だが、こうしたボランティアの存在や必要性は、まだ十分に知られていない。活動を広げるには、多くの医療者に意義を認識してもらうことが必要だ。

県内・首都圏から30人

「親は子どもの病気を早く治すことばかりに目が向きがち。ボランティアさんが、生きている今を楽しむ大切さに気づかせてくれた」。県内外のボランティアら約三十人が集まった交流会で、東京都の水島洋子さん(40)は語った。

一人娘の佳奈乃ちゃんは、悪性リンパ腫を患い一昨年十一月、八歳で亡くなった。入院は計三年半余りに及び、治療のストレスを親にぶつけるようになった。

亡くなる半年前、医師から遊びのボランティア「ガラガラドン」を紹介された。今回の交流会を企画した東京都の坂上和子さん(53)が一九九一年に始めた活動だ。学生ら十人が交代で病室を訪れ、折り紙や編み物をして遊んだ。佳奈乃ちゃんに笑顔が戻り、親の看病の負担も減った。

佳奈乃ちゃんが他界してからも、水島さんとボランティアとの交流は続いている。坂上さんらとともに病棟での遊びの重要性を訴えることが「心の支えにもなっている」という。

◇

訪問保育士だった坂上さんは、白血病の二歳の子が病院に一人で入院していると知り、より多くの親子を支えようと、遊びのボランティアを始めた。六人で始めた活動は約七十人に増加。東京、千葉の病院計六カ所に活動が広がった。

だが、医療の中にボランティアの役割がしっかり位置付けられているわけではない。大抵の病院は「なぜ治療中に遊ばなくてはならないのか」と、喜んで受け入れてはくれなかった。

坂上さんは一昨年、海外の事情を知ろうと、米国とカナダのこども病院を訪ねた。五百―千人以上の住民が病院を支え、ボランティアの活動を調整する専任の職員が複数いた。日本との差に驚いた。

楽しい時間 闘病の力に

医療者の理解 活動の課題

◇

県内では、多くの病院がボランティアを受け入れているが、県衛生部によると、子どもと遊ぶ活動の実態は把握できないという。ただ、窓口を設けている信大病院（松本市）など受け入れを進めている病院もあり、中でも県立こども病院は積極的だ。

現在、子どもと遊ぶボランティアのほか、保護者の理髪、庭の手入れ、病棟を回る道化師など、百人以上のボランティアを受け入れている。坂上さんも「病院とボランティアの垣根がこれだけ低い病院は少ない」と評価する。

同病院は、専任ではないがボランティア担当の職員を置き、各病棟に活動を支える保育士がいる。ボランティア受け入れを担当する看護師、赤羽貞子さんは「『外部から多くの人が入ると、感染症の危険があるのでは』と慎重だった。やってみると、活動してもらって良かったことの方が多く、病院にはボランティアがいるもの、と職員の意識が変わった」と話す。感染症も、手洗いなどで防げるとの認識が広がった。

こども病院で九七年から読み聞かせなどの「お話ボランティア」に取り組む松本市の越高令子さん(59)は「子どもが目を輝かせれば、親の表情も明るくなる」と言う。

坂上さんたちは、遊び相手となるボランティアを正当に評価してもらおうと、実績を細かく記録し、定期的に「通信」を発行。昨年度は土曜を中心に百十五回活動、延べ約六百人のボランティアが、四百五十人近い子とかかわった。「医療者の信頼を得るため、休まず活動を続けることが大切」としている。